

紀伊・房総両半島における地名分布の 類似性と古代日本人の擬きの連想空間

山 田 安 彦

動機と目的

従前から古代東北の歴史地理を踏査しながら、留意していたことは、古代の東北開発を誘発した始源的動機が何かということである。畿内政府が多くの犠牲と莫大な財力を費しながらも間断なく東北に対して積極的に開発を推進した。その基底要因を把握したい。

もはやそれは説くまでもないが、古代国家の財政的基盤となった水田農耕を東北に拡大することである。しかし東北は冷涼気候であり、水稲耕作に東北全般が適地であるとはいえない。それにも拘らず、水稲開発を東北政策の至上面題としたので、「負」の条件を宿命的に荷担したことになる。水稲の東北推進は、古代国家領域の拡張に関連することであり、また国家体制の統一という基本的組織にも連繫するものである。古代の国家という組織と体面を整えるためにも、さらには、生産と生活の基盤である土地を確保するという観点から考えても、北方に展開する未知の東北はエクメネーの拡大には大きな魅力であった。しかしながら、古代国家の確立という面目のためとはいえ、積極的に

推進した東北開発は、決して成功ばかりではなかった。むしろ、畿内側が苦境に落ち入ったことも少なくなかったのである。しかるに、恰も東北に魅せられたかの如くに、東北へ、みちのくへと畿内の国家的権勢を伸展させたのは、畿内政府の国家的面目ということも無視しえないが、未知の土地への探究という潜在的要因と未知の世界を把握することによる理想郷の実現という願望をもまた無視しえないのではなからうか。

その潜在的要因もまた基底要因をも探りたいのである。さて、古代国家成立の当時は、過去の記録だけでなく、その時点における情報にも乏しく、自己の経験が知識の全てであったと考えられるから、空間的知識の範囲はきわめて限られる。したがって、未知の土地空間は不可解であると同時に、不安でもあり、恐怖でもある。それに様々な自然現象による不可思議や災禍的恐怖による不安が、より一層に未知の土地を強烈に意識させるようになる。その不安や恐怖を解消するためには、未知の土地を探知して熟知しておく必要がある。そのことが食糧生産の基礎的条件となり、また食糧獲得の再生産のために不可欠となり、さらには生産発展のためや居住地安定のためにも必須のものとなる。それと共に一方では、その不安心や恐怖心を少しでも除去するために、不可解な現象や災禍を神や精霊の敵対者である悪魔の所為であるとか、あるいは神や精霊の咎であると考え、神や悪魔に祈願するようになったと考えてよからう(1)。

さて、古代人はそのような未知の東北をどのように把握し、認識していたであろうか。それについて筆者はすでに次のような方法で理解しようと試みてきた。まず研究分析の材料としては、先・原史遺跡、古代城柵、条里的地割、および古代神社寺院等の宗教的諸遺跡その他の地表面に残存する古代諸遺跡を主に取り挙げ、畿内文化や古代国家中央政府の権勢が近畿からみれば未知の土地である東北日本の蝦夷地に滲透する過程と、一方逆に蝦夷地が古代国家体制内に編入されて蝦夷地という事実を解消する過程を究明し、国家体制と蝦夷との接触地帯である漸移地帯の地域空

間構造の変容を把握しようとする(2)。もちろん今もその究明を遅々としてではあるが続行している。

本稿もその一部である。その課題究明のための東北踏査の際、予め懸念していたことであるが、鹿島・香取の神の裔社が、東北浜通りの河川下流・河口付近から北上川河口付近にかけて比較的多く鎮座する。そのことについてはすでに別稿(3)において論説して、房総・常陸から海路沿岸伝いによる東北開発の北進を推論した。そのこともあって、古代東北日本の開発を太平洋沿岸という巨視的視野から追及しようとしたのが本稿であるが、今回の研究もその端緒の域を脱しえない。

そこで今因みに、国土地理院が編集した日本全土の平均気温図(一九七三年)をみると、五畿内平野部から紀伊半島太平洋沿岸・東海地方・関東平野・房総・浜通り地帯・仙台平野にかけて気温に大差がないので、畿内人は同じ風土を求めて進展したとも考えられる。したがって古代東北の開発を考察しようとすれば、日本海沿岸經由の経路も考えられるが、まずは畿内から太平洋沿岸を含めて黒潮による影響を通覧すべきであろう。

しかしながら、本稿で太平洋沿岸を經由して畿内文化が移動進行する過程を追及しようとするのではなく、その移動の形跡から移動による遠古の日本人の空間認識を把握しようとするのが本稿の目的であるが、筆者にとってそれは余りにも重荷であることは承知している。別稿(2)でも論述したように、常陸・下総から、あるいは関東北部から東北に入植した過程を概観したので、ここでは畿内から房総・常陸あたりまでを考察するが、特に紀伊と房総の両半島に若干の類似性が認められるので、それを観察材料にして分析を着手したい。もちろん、本稿でその目的に近接しえたとはいえないが、それへの傾向に若干なりとも問題提起の端緒にもなればと願う次第である。また本課題の分析証明は困難であり、論旨の展開に明晰な客観性を欠き、多分に推論を重ねた部分も少なくないことを承知している。

方法概念の欠除

本研究の対象が遠古の地域現象であり、しかも、日本列島の本州の半分ぐらいを占める広範囲（紀伊―房総）にわたっているので、当時の地域現象を事実として把握するには、容易なことではない。明確な記録や文書があるわけではないし、また限られた古文獻や若干の考古学的証拠についても信憑性と意義付けについては充分なる検討が必要である。それを補填するために、地表面に残存する古代的遺制や痕跡、それに加えて現存する民間的伝承の残像を合わせて考察したいと考えている。それらを観察すると、本州という同一島内であり、当時のことであるから甚しく外来文化の影響を受けていることはないので、紀伊と房総の間に類似する現象が少なくない。しかしそれを系統的に関連を実証し、畿内文化の伝播経路を探求しようとすると直ちに多くの難点に遭遇し、時には証明不能となり、あるいは推論も困難となる。そこで房総の古代景観を分析して近畿との関係を追及することを試みるが、当時の史料が乏しいので、推論の域を脱しえない場合が多い。したがってそれを補足する意味で神話伝承なども分析して間接的な立証に役立てたいが、それでも不十分な場合が多々ある。そこで居住地域の様相や文化景観の配置を通して、古代人が当時の自然的基盤を環境として如何に知覚し、心像を画いていたかを推論したい。この知覚的推論をもって前述の分析を補うように試みようと考えている。その知覚的推論によって、古代人の宇宙観というか、地域観のようなものまで想定しようのではないかと想像している。これが延いては現代人の地理観を理解するのに、若干なりとも貢献することにもなろうと細やかな期待を筆者は持っている。またここに本研究の現代的意義があるのではないかと密かに思うのである。

そこで古代人の空間的知覚を推論するための思考的構築を次のように考えてみることにした。このことはすでに別稿(4)において論述したが、その要点のみをここに再掲する。知覚は経験と学習により、また共同体の歴史的發展により変化するもので、歴史的知覚の把握には歴史的發展や変化の過程を理解しておく必要がある。なお空間は人間の経験の拡大であり、空間的知覚は人間が外界に対応する適応行為の一部でもある。環境を知覚する方法は、環境全体に適應する過程の関数でもある(5)。そのためには、まず人間と環境の存在形態の関係をみると、カルチュア(文化)とバイオーム(人間・動物・植物・三者の生活有機体の総複合組織)とハビタイト(土壌・気候などを包含した居住地)が相互に関連する鼎立脚的な生態系である(6)。その生態系を基盤にして類型化された環境は、類型化された地域であり、また類型化された景観でもある(7)。その地域のなかでの人間集団の生活存在形態をみると、場所(土地の自然的性格)と労働(労働経済的活動とその維持形態)と民族(種族と遺伝的性格)とが相互に関連して三脚台となって鼎峙している(8)。このように生態的に考察すると、地域内における生活形態を分析するには、種族やその遺伝的性格、また歴史的慣性からの接近も不可欠となる。多くの地域現象の事実からも考えられることであるが、環境が同じである場合、種族の遺伝的性格や歴史的慣性習性は持続されようとする。マイツェンが多くのヨーロッパ民族の村落や耕作景観と農業制度を調査研究して、村落はその成立当初の景観様相を永く遺存する場合が多いという仮説を樹立した(9)。時間を経過しても同じ民族、同じ環境のなかでは景観は持続する場合が多い。なお現在の地域現象をみると、第二次世界大戦後、岩手山麓に各地から入植した際、その居住地や集落名に自己の出身地の地名を命名したり、出身集落の構成を基礎にして村落を形成したことも地域生態研究の好事例である。

このように考慮すると、土地を説明するのに、ライトが主張したように(10)、まず過去から現在にかけてのあらゆ

る地理的知識を理解すべきであり、その土地住民の地域的空間知覚を多く把握する必要があるという。いうまでもなく地域の様相には、その基底に地域住民の空間的知覚が大きく作用している。つまり人間の知覚が物理的存在となつて、地域空間の形成要素となり、その知覚は具象化されて景観となる(15)。その地域形成に対する地域住民の経路というものは、地域住民が自然を環境として知覚するその過程構造が地域形成への行動の過程となる。これをさらに始源的に考えれば、行為の経路としての地理的空間形成における行動的要因となる心像は、前意識的な心像によつて形成されるのである(12)。要するに、地域における人間の自然的基礎に対する心像が地域形成の主要因となる。

地域形成の行動的要因として、東洋人の思维方法が注意される。その方法は感覚の信頼であり、特に視覚表象に訴えて直観的に理解しようとしている。象形文字は抽象概念を表示しており、また哲学的思想においても、易学における諸事象の説明が著しく図示的説明を好む傾向にある(14)。このことは中国文化の影響を受けたわが国の都城的集落の象徴に認められる(14)。印度や中国の宗教的・哲学的思想がわが国に導入されても、一般に複雑な表象を構成する思维内容は、民衆に受容されないので、導入されると大きく変化させて単純な象徴的表象とすることにより民衆に愛好されるようになった(16)。このことから考えて、地表面の地域的諸施設の配置構成は、単純で斉整的な象徴を呈するが、その単純性は単に複雑性の抹消としてではなく、複雑性を昇華して単純化し、斉整的な内容へと止揚したのではないかと推察する(16)。このような思维内容が古代の地域形成に大きく影響し、視覚による美観の自然景観の根底には、神の摂理や自然の条理による形而上的な秩序が存在するものと信じたので、古代人は地域的諸施設や地割まで、その秩序に調和させ整合させようとする思维が働くのである。畢竟するに、その結果、地表上の施設配置景観が象徴となり、その象徴を媒介として、古代人は自然や神に接近しようものと思じたのである(16)。すなわち地表上

の諸施設の配置や諸景観を象徴化して神の意に沿うように考慮したのである。このような象徴的な地域空間の配置構成は図示的な解釈に繋がるものであり、その表徴は神の意や自然の摂理的秩序に合致した姿であると信じ、これを媒体として人間と神、人間と自然とが一体的に接近することになると信じた。所詮は、それは現実を理想化する過程であると考え、地域空間構成と地域的諸施設の配置に努力し、現実社会を安寧息災に導く宗教的信仰でもあった(17)。

本稿で対象とするのは遠古の地域空間であるため、実在的知識や抽象的知識が充分でないので、それを補填する意味で、知覚的知識と理解的知識をもって(18)、古代日本人の宇宙像や地域空間像を推論し、当時の土地の様相を考察しようとした。しかしその方法概念にはまだ欠除している部分が多い。

類似地名の分布

紀伊・伊豆・房総の三半島のそれぞれに類似する地名が分布するということはすでに周知されている事実である。

その若干については先学の指摘があるが、そのいずれもが小縮尺上の地図に現われている類似地名の指摘である。そこで筆者はそれらをも含めて、大縮尺の地図を通覧して抽出してみた。それを次の表に掲げることにしてしよう。

類似地名表に掲げたのは、広域的にそれらの地図を通覧して管見に入ったもののみであるが、局地的に字名までも徴視するならば、なお多くの類似する地名が存在するかも知れない。そこで実は字名も調査することを実施したが(19)、字名の場合には局地的な歴史的由来や地形、その他に依拠して命名されたものが多いので、ここでは取り扱わないことにした。冒頭にも説述したように、本稿では紀伊・房総の関連内容を探求しようと考えている。それらの類似地名は同字同訓(音)、行政村名および地域名などを探る方がその意図に合うことであろうと考えている。それらの類似地名は同字同訓(音)、

同訓(音)異字で類似するが、そればかりではなく位置的にみても半島の陸地形状や地形的立地状況も類似するので、両者の関係を求めたくなる。もちろん、なかには同音異義というか、全く関係なく近年になって偶然に類似地名が命名された場合もある。いうまでもなく半島というものは、概観して大きく共通する点がある。それは三方が海に面していることである。紀伊半島と房総半島はそれだけでなく、投影図形の半島の形状が、規模は著しく異なるが、若干相似するところが見られる。それに、四国東部・淡路島をも包含して概観すれば、大阪湾と東京湾とがやや類似するのである。このようにみれば、三浦半島が淡路島の位置に相当することになり、両半島の陸地形状はますます類似することになり、半島形状上における類似地名の位置も大体類似することになるのが面白い。なお伊豆半島も合わせて概観すると、紀伊半島の先端部にある地名は、伊豆・房総両半島にもその先端部に類似地名が位し、また紀伊の東海岸部にある地名の類似地名が房総の東海岸に分布する。それを具体的にいえば、(江奈)・野島・目良Ⅱ(布良)・白浜・勝浦・田原・神前・浮島(伊勢・常陸)などが指摘される。

さて、房総半島の陸地形状を詳細にみると、古代人は房総半島の野島崎を紀伊半島の串本、房総半島の洲崎を紀伊の日ノ御崎、房総の犬吠崎を志摩半島に相当させて考えていたのである。房総洲崎と紀伊日ノ御崎の民俗伝承や民俗行事内容が相通する諸点がある。犬吠崎を先端とする下総東部の遠古の環境についてみると、『常陸風土記』や原史諸遺跡から推察するならば、遠古の北浦・霞ヶ浦の水域は現在よりも広く、潟湖の湾入は甚しかったと想定される²⁰。『常陸風土記』の信太郡の条に、「乗浜^{のりなべ}の里の東に浮島の村あり。長さ二千歩、広さ四百歩なり。四方絶海にして、山と野と交錯り、戸は一丁五畑、田は七八町余なり²¹。」という記事があるように、浮島は名称の通り島を形成する。しかし現在の浮島は、茨城県稲敷郡桜川村の一部で完全に陸化しており、常陸台地の東辺に標高二米余の沖

紀伊・伊豆・房総類似地名表

和歌山県有田郡古江見	和歌山県日高郡由良町網代(あじろ)	和歌山県日高郡由良町衣奈(えな)	和歌山県日高郡由良	兵庫県洲本市由良	和歌山県日高郡由良	和歌山県有田郡湯浅町栖原	和歌山県有田郡初島	兵庫県洲本市加茂	和歌山県海草郡下津町(旧加茂村)	兵庫県三原郡南淡町洲崎	紀伊(含淡路)	伊豆	房総(含常陸)
	静岡県熱海市網代(あじろ)	静岡県加茂郡松崎町江奈(えな)	静岡県加茂郡松崎			静岡県下田市(旧加茂郡稻梓村)須原	静岡県熱海市初島	静岡県賀茂郡加茂村 下田市大賀茂 静岡県加茂郡南伊豆町加茂	静岡県賀茂郡丸山町加茂 鴨川市加茂川	静岡県下田市須崎			茨城県行方郡塩島町明石
千葉県鴨川市江見	千葉県夷隅郡御宿町網代(あじろ)					千葉県山武字九十 九里町須原		千葉県安房郡丸山	千葉県館山市洲崎				

和歌山県西牟婁郡白塔村(旧富里村)	和歌山県西牟婁郡大	和歌山県西牟婁郡日置川町(旧川添村大瀬)	和歌山県西牟婁郡日置川町(旧川添村大瀬)	三重県度会郡度会町市之瀬	和歌山県西牟婁郡土富田町市ノ瀬(いちのせ)	和歌山県西牟婁郡中辺路町(旧栗栖川村)石船(いわぶね)	和歌山県田辺市目良(めら)	和歌山県御坊市野島	和歌山県日高町美浜町和田	紀伊	伊豆	房総
静岡県下田市白浜		静岡県加茂郡南伊豆町(旧南崎村)	静岡県加茂郡南伊豆町市ノ瀬			静岡県加茂郡南伊豆町妻良(めら)	静岡県加茂郡南伊豆町妻良(めら)	千葉県安房郡白浜町野島崎	千葉県安房郡和田町			千葉県安房郡和田町
千葉県印旛郡富里村	千葉県印旛郡富里村					千葉県夷隅郡大原町岩船(いわぶね)	千葉県館山市布良(めら)					

紀伊	和歌山県西牟婁郡串本町(旧和深村)	静岡県加茂郡西伊豆町田子	千葉県安房郡鋸南町田子
和歌山県東牟婁郡那智勝浦町			千葉県勝浦市
和歌山県東牟婁郡熊野川町(旧九重村)			千葉県館山市九重(旧九重村)
和歌山県東牟婁郡古座町(旧田原村)			千葉県鴨川市(旧安房郡田原村)
三重県鳥羽市加茂川(河川名)			千葉県鴨川市加茂川(河川名)

紀伊	和歌山県和歌山市神前(こうざき)		千葉県香取郡神前(こうざき)町
三重県度会郡二見町神前(こうざき)岬			
三重郡二見町神前岬	静岡県賀茂郡西伊豆町浮島		千葉県安房郡鋸南町浮島
東方鳥羽市管轄浮島			茨城県行方郡桜川村浮島
三重県三重郡朝日町			千葉県旭市(旧海上郡旭町)
三重県龜山市(旧鈴鹿郡龜山町)			千葉県君津市(君津郡龜山村)

積平地によって幅広く陸繋化している。したがって現在の地形から判断するならば、標高二米余から三米までは海域が入り込んでいたと推測しうる。しかしこの数値は控え目であって、遺跡などから推考すればより海域が拡大していたと想像される。このようにみれば、伊勢の神崎岬(22)に相当するものとして、下総北部に神前(23)が位す。両者は同字同訓であり、前者の北東海上に浮島(24)が浮ぶように、後者の北北東に霞ヶ浦の浮島が存在する(25)のである。さらに想像を拡大すると、伊勢神宮鎮座地に相当する位置に、香取神宮を勧請したのではなからうか。それらは偶然の一致かも知れないが、人間は前述したように、宇宙像地域像の心像を有するから、居住地を變更しても過去の居住環境と同一の環境を持続しようとする習性がある。これがここにいる擬きの連想空間の心像である。

さて論ずるまでもないが、地名の類似性の追究には、地名発生の由来を把握する必要がある。前述の同字同訓の房

総における地名は過去古くから存在した。特に、白浜・田原・勝浦などはすでに『倭名類聚抄』（除勝浦）に現われている⁽²³⁾のである。なお、今回筆者の指摘した類似地名の神前についてみると、伊勢の神前は東二見の大字松^{まつた}下にある岬で、『倭姫命世紀』には荒崎^{あれ}と呼び、式内社神前神社が鎮座する⁽²²⁾。なお、伊勢の浮島は、伊気浦の海上にあり、「河内躬恒家集、延喜十七年伊勢齋宮御屏風」の題詠に記載されているというので⁽²²⁾、古来からそれらの地名があったと考えてよからう。一方、下総の神前は、かつて大戸庄とともに、二〇年毎に香取神宮を改築する時に、嬬殿^{かきまの}を造る定役であり、また両庄は大祓宜家の領知するところであったと長寛二年（一一六四）の「関白左大臣家政所下文」にみえるという⁽²⁴⁾。その北北東の対岸に浮ぶ浮島は『常陸風土記』の信太郡の条に、集落を営み農耕する農村生活の記事があるので⁽²⁵⁾、古代にはすでに周知の島であった。このようにみれば、それらの地名は古代にはすでに存在しており、また半島の陸地形状における位置的関係までも類似するということは偶然の一致として無視してよからうか。再度いうが、前述したように、類似地名が二〇余例も数えられるということは、偶然というよりは擬きの連想空間の構成によるものではないかと想像したくなるのである。そこでそのような発想を惹起するようになった過程を辿ることにしよう。

『古語拾遺』からみた紀伊と房総

それら両半島の始源的関係を探るには、『古語拾遺』以外にない。そこで『群書類従』所収⁽²⁶⁾のそれによれば、大同二年（八〇七）二月十三日に、従五位下齋部宿祢成成が撰上したことになる。その内容を一部要約すると、天富命が阿波の齋部氏を率いて東方の土地に移住、麻のよく生育する土地を総国と呼び、阿波忌部の居住する地を安

房と呼称し、天太玉命を祭神とする神社を安房神社という。この安房神社は式内社であり、元社地は現社殿の西方にあるといわれ、古代祭祀遺跡も発見されている。同祭神を祀る神社が紀州海草郡鳴神村（現和歌山市鳴神）に鎮座することを、『特選神名牒』から見出した²⁶。それを鳴神社という。この両者の関係も無視しえない。両神社ともに、西方に海を望むという環境も類似する。

安房神社が鎮座する房総半島先端部西海岸に、天富命が西方の海から上陸したという伝説がある。そこは館山市大字太神宮（旧安房郡太神宮村）の小字香取^{かんどり}である。この小字は西から東へ約五、五町、安房神宮に向って伸びる幅員約一町の狭長な字区で、これを境に北は大字相浜^{あいはま}、南側は大字布良^{ぬら}がある。したがってこの小字香取が、それら両字区の带状の境界地帯をなす。地元の口碑伝説によると、この小字の带状の地区は、天富命が西の海上からここに上陸し、太神宮の土地に到達した経路であるという。そのために道路状の狭長な地割形態を形成するようになったもので、地元民は今も「神の通る道」として信仰し、この地帯の地割の変更を忌み嫌う²⁷。また「かんどり」は舵取りの転訛したもので、これも航海との関係がある。さらに、その伝説内容が近代になってもなお強力な拘束力があつた。明治中期の町村合併の際、相浜と布良が合併して富崎村を設置した。その時、小字香取が新設の富崎村を二分するので、行政管理上、香取を編入合併しようと、太神宮村にその旨を申し出た。しかし、太神宮村は天富命の通行した「神の道」であるから、他の町村に所属することは許容されないとして、その申請を却下している²⁸。そして太神宮村は神戸村を新設した。かかる伝承と地割との関係については、筆者も別の機会に現地調査を実施し、別稿に試論を展開しておいた²⁹。またかかる宗教的伝説が背景になる場合、それに関連する地割景観は長く持続する。これに類する事例は多い³⁰。この香取の「神の道」伝承は『古語拾遺』の記事内容と適合するものであり、西南日本か

ら房総への移住は海路を利用して安房西海岸に上陸したのも一経路であろうと推察して顕著な誤謬はなからう。

海路は危険を伴うが、その他にも海上経路の伝承がある。鹿島神宮の社伝によると、武甕槌命が鹿島に到来した経路については明確ではないが、行方郡を通り、現在の潮来町大生原を経て、流海に出て大海（鹿島灘）から明石の浜に上陸している。その浜は鹿島神社の北東方の鹿島灘沿岸の海浜である。それから沼尾を経由して鹿島に到着したといわれている。この伝説も今なお信仰され、明石の浜には神門しんもんという大鳥居が太平洋に面して建立されているのである⁽³⁰⁾。

前述した香取伝承は黒潮を利用して、西南日本から安房西岸に上陸した経路を物語る。一方、明石の浜の伝説は、行方郡までの入来路は不詳であるが、海路を利用して上陸したことを伝えるものであり、東から上陸したことに意味が存在するのであろうか。僅少の事例で、しかも口碑伝承のみで西南日本から海上を経由して房総に渡来したとはいえないのであるが、局地的な宗教的伝承が信仰となって今もお残続し、地表面にまでその痕跡を留める程に、房総および常陸は西南日本、特に畿内との関係が深かったことを示唆するものであろう。

考古学的証拠からみた近畿と房総

考古学的証拠を探るまでもなく、房総は西南日本の文化的影響を受けていることが断片的に推測しうる。それが近世になると、その影響がより明瞭となり、その証拠も明確となる。近畿の影響だけでなく、遠くは南西諸島の特徴的民家である分棟型民家が、房総半島の南端部安房海岸に今も若干分布することから⁽³¹⁾推察して、黒潮による南西諸島系の影響も注意しなければならない。古代の場合については後述するが、近世になると、周知のことであるが房総

の漁法は、紀伊から伝播してきたことは明白である。それに加えて、近世の紀伊沿岸漁民の移住については、古文書や墓石があり、具体的な証拠が存在する(32)。

近畿と房総の関係を論ずる場合、注意すべきは紀伊熊野の信仰である。熊野は古代から出雲との関係が深く、深山幽冥神秘的な環境と常世信仰とが結合し、常世国への通路と考えられ、平安初頭から修験や山岳仏教の道場として栄え、神仏信仰の霊地となった。古代日本人の東方常世想定思想と熊野信仰との関連は詳らかではないが、房総には多くの熊野神社が分布する。この分布には重要な意義が存在する。紀伊熊野神社を中心にして、各地に三〇七二社の裔社が分布するが、そのうち房総には二六八社が鎮座している(33)。しかも外房にそのうちの一二七社が分布し、その他はそれ以外の房総各地に分布する。なお、紀伊と房総では民俗信仰も類似すると指摘されている。それらからも推論して、紀伊からは海上を経由して房総に及んだと考えて大差はない。

さて、対象とする房総の古代における地域的諸相について考察しよう。まず畿内との関係を把握しようとするならば、全国的政治組織のなかで、大和朝廷の支配者は、支配権力の象徴として古墳を築造し、それを誇示した。したがって大規模古墳(前方後円墳)の発生は全国的視野からみて畿内が中心であろう。そこで地方にその古墳が存在するということは畿内の影響を無視しえないのである。

房総の前方後円墳を中心とする古墳分布を概観すると(34)、次のような諸地域に分けられる。まず内房では、小糸川下流に富津飯野古墳群があり、その中心的なものは内裏塚前方後円墳である。東国では五世紀後半から六世紀前半にかけて古墳の最盛期であり、大規模古墳が築造された。この内裏塚古墳の南方で、浦賀水道に面した富津市小久保の岩瀬川と小久保川の河口部に介在する海成段丘先端部に弁天山古墳が立地する。これも前方後円墳で、堅穴式石室

の天井石に縄掛突起があり、奈良の日葉酢媛陵や大安寺野神古墳と類似するといわれている。小糸川右岸の丘陵を越えると小櫃川流域が展開する。この流域一帯は馬来田国造が支配したと推考されている。ここには手古塚・大塚山・金鈴塚などの前方後円墳が分布する。小糸川と小櫃川中間、小糸川寄りの海成段丘先端部に立地する木更津市小浜手古塚古墳はこの地帯最古のもので、主体部は粘土層であり、邦製の三角縁神獸鏡を出土している。この海岸は三浦半島走水とは指呼の間にあり、古い東海道は相模から上総に上陸した地点にあたと考えられる。この点においても重要な位置にある。なお内房北部の養老川南岸の市原台地にも古墳群があり、左岸には山王山・二子墳などの前方後円墳が立地する。しかも後者は、養老川南岸一帯を支配といわれる上海上国造の墳墓にあたと伝えられる。南岸の姉ヶ崎群集墳はその国道一族の墓地であったという伝承が今に残る。二子山古墳・天神山古墳・釈迦山古墳・山王山古墳などが分布する姉ヶ崎海岸丘陵先端部の古墳群の中央部に式内社姉ヶ崎神社が鎮座し、北東2km余に同じく式内社の島穴神社が勧請されている。

東上総では一宮川上流の端沢川流域の長生郡長南町芝原にこの地方最古の古墳といわれる前方後円墳の能満寺古墳がある。この古墳の主体部は舟型木炭層で、三角縁神獸鏡を出土している。それらから推論して五世紀初頭のものであろうといわれている。なおこの地帯から北東方の栗山川上流域、芝山町東南部の芝山を中心にして、横芝町西北部、松尾町北部一帯の台地上に古墳群が分布する。ここで主体をなすのは六世紀の築造といわれる姫塚前方後円墳で、この北側の墳丘には多数の人物や動物の埴輪で囲繞されている。この流域一帯の古墳群は九五〇基を数えるといわれ、武社国造の支配範囲であったと推察されている。

下総についてみると、香取郡小見川町の城山古墳群がある。この一帯は下総台地の北部突端部で、旧入海の安是湖

(現利根川下流)⁽³⁵⁾に臨む。そのうちで最も知られているのは第一号古墳である。これは前方後円墳で、三角縁神獸鏡(複製式三神五獸鏡)を出土している。このことは驚異的なことで、山城国相楽郡山城町椿井大塚山古墳から発見された舶載三角縁神獸鏡類の同范鏡であるといわれている。椿井大塚からはその鏡が三八面も出土しており⁽³⁴⁾A、各地に同范鏡が若干みられる。これは畢竟、中央である畿内と地方豪族との従属関係を物語る重要な証拠であり、また分属関係をも示すものである。論ずるまでもなく、六世紀の東上総における畿内文化の影響を証左するものであり、また当時の地方豪族の富強と権威を象徴するものであるといつてよい。

なお下総の中心では、印旛沼の周辺、特に北東部の岩屋古墳並びに竜角寺古墳群と東部に公津古墳群が分布する。下総西部の東葛飾郡では我孫子古墳群と下総国府があつたと思われる市川国府台にも古墳群がみられる。我孫子中峠古墳群の南、手賀沼を介在して対岸、すなわち手賀沼中央部南岸、下総台地北部末端部の沼南町手賀字北作にも古墳群が分布する。この北作一号墳は能満寺古墳に並ぐ初期の古墳であるといわれ、ここからも三角縁神獸鏡が見出された。房総の前方後円墳をみると、主軸長が内裏塚では一四四m、天神山古墳一二五m、弁天山古墳では八六m、能満寺古墳七三、五m、手古塚は約六〇m、山王山古墳・二子塚は八〇―九三mもあり、姫塚は約六〇m、城山第一号墳は六八mであり、地方としては大規模な形態である。また出土遺物などからも推察して、地方豪族の権勢を象徴するものがあり、畿内との従属関係をも物語る。古墳分布地域に中小豪族が居住し、それらを統合する大豪族が存在した。それが大和政権下に編入されて国造となつた。房総には一一の国造が支配した。

さて、さらに横穴からも畿内と房総の関係を考察してみたい。横穴は房総全域に散在するが、特に上総に多い。就中、茂原・君津周辺にその分布は濃密である。なお、安房の中央部の丘陵地帯にも若干集中する⁽³⁶⁾。まず注意すべ

きは、浦賀水道を介在して三浦半島先端部の走水と相対する富津海岸段丘の横穴群である。そのうち富津岬の根元南海岸に臨む富津絹丘陵突端部南側に二群一〇基よりなる横穴群が存在する。就中、その一号横穴の羨道左（西）に明瞭な刻字「許世」(縦三五・横二四cm)がみられ、この右隣り玄室側に「大同元年」の銘がある⁽³⁷⁾。また一〇号横穴の羨道右（東）に「木」と刻まれている⁽³⁷⁾。前者の「許世」は「こせ」、「木」は「き」であり、前者は居勢、許勢、巨勢に通じ、後者は「紀」とも書く。両氏ともに強力な氏族であり、房総三国にその両氏姓の記録は少なくない。六国史などに房総三国の「守」・「介」の氏姓名に「巨勢」と「紀」が一〇数例みられる⁽³⁸⁾。その刻銘が横穴造成時期に刻字されたものであるか、否かは検討を要するが、その古銘は横穴の所有者であるとも推量される。なお「こせ」は奈良県南葛城郡巨勢山、あるいは御所市（旧南葛城郡葛村）古瀬であろうし⁽³⁹⁾、古瀬には巨勢寺があった。なお、その字高社には式内社巨勢山口神社が鎮座する⁽⁴⁰⁾。この神社名と類似する神社としては、大和高市郡（橿原市内）鳥屋に巨勢山坐石椽孫神社⁽⁴¹⁾と、同郡坂合村（明日香村）大字越に鎮座する許世都比古命神社がある⁽⁴²⁾。『倭名類聚抄』に掲載されている「巨勢郷」⁽⁴³⁾は、巨勢山口神社の北方、高市郡高取町の越智岡から橿原市南西の北越智（新沢）にかけての付近一帯であったと推考されている⁽⁴⁴⁾。これらの土地は巨勢氏と関係が深かったであろう。その巨勢氏は斎部氏の一族である。そうすると、大和国巨勢と上総との関係も無視しえないであろう。なお上総の富津字網の南約3kmに「古船山」という地名が残ることも偶然ではないように思えるのである。

絹横穴群から南へ約7kmの付近に大満横穴群がある。ここもやはり浦賀水道を介在して三浦半島と指呼の間であり、湊川下流右岸、富津市上総湊岩坂の海岸段丘南斜面に立地する。その調査された数は五八基で、四支群に分散する。その第一群一号横穴の羨道左壁に帆船、同右壁に船と網、同群二号横穴玄室天井に船、同奥壁にやはり船の線刻

画が画かれている(45)。それらの線刻画は横穴造成時に施されたものであるというには躊躇するが、一応は大溝横穴群造成者は船と深い関連があったと考えても大きな誤謬はなからう。そう推論すれば、船で渡来してきたを意味し、また前述の論説と合致することになる。

再度いうが房総は航海と関係が深い。「香取」は舵取りが音便で「かんどり」となり、さらに「かとり」と転訛したといわれる。また「かんどり」というのは舵、または船の古語堅間に因んだともいう。『日本書紀』の神代巻二に、「此の神は今東国の概取の地に存り」(46)とも記されている。この神とは齋主いはひの神のことであり、すなわち神を齋祭する者で、下総香取郡の伊波比主命である(47)。概取とは『倭名類聚抄』(48)にある下総国香取郡香取郷に比定される。ともあれ、房総は航海に関係が深い。地名も右に説述したものだけでなく、航海には「星」が重要な目標の一つとなるので、房総には星に因む地名が比較的多く指摘しうるのもそのためであろうか。論ずるまでもなく、西南日本の四国・紀伊あたりから東航するとなると、黒潮に乗り、北極星や北斗七星を航路進行方向の目標物と定めたことであろう。しかし、星に因む地名が、航海のための星信仰に由来するとは今直ちに論定しえない。またそれを証明する術も目下のところ不能である。そこで参考までにその地名を掲げると、市原市上総牛久の北東に「高星山」があり、香取神宮の境内に「星塚」がある。また、この神宮自体が亀甲山に鎮座する。亀甲とは玄武であり、北の意である(16)(17)。なお、鴨川市曾呂川上流流域の山中に「星畑」という地名があったといわれる(49)が詳らかではない。また山武郡大網白里町の旧大網に「星谷」と「星野ノ内」があり(49)、前者は旧名を「星谷野」という。千葉市東部にも「星久喜」という字名(現町名)がある(49)。この他、筆者は未確認であるが、安房郡富山町の平郡に「東星田」、小糸川の南岸に「星谷」、夷隅郡大多喜町の旧老川に「星村田」という地名があるときく。

さて、航海者にとって重要なことは、航路の進行方向を決定するための目標物である。それは大海原においては、明瞭に北を指す北極星であり、それに関連する北斗七星である。香取神宮は前述したように、亀甲山に鎮座し、星塚を祀る。いずれも「北」と関係がある。この香取のすぐ北は、遠古では現在のように沖積化が進行していなかったから、入海が広く、安是海を形成していた。その安是海を介在して対岸に、鹿島神宮が鎮座する。香取・鹿島の二大神が水郷の南と北に相對して鎮座するのは、いかなる歴史的背景を控えるのであろうか。立地形態からみれば、安是海を介在して対向集落を形成していたと考えられる。なお、別稿(2)に論説しておいたが、香取・鹿島の裔神が東北の磐城・行方・亘理・信夫・牡鹿・黒川・栗原などの諸郡に分布することは、香取・鹿島を東北開発への前線基地として東北の太平洋海岸沿岸や河口、主要河川沿岸に進展したのであろう。このようにみれば下総では常陸を経て、「北方」への信仰が熾になる基盤が存在するのである。それを表徴するかのように鹿島神宮の社殿は、北を向く。しかし神座は東向きである(50)。一方香取神宮の奥宮も北を向く。『日本書紀』景行天皇紀四十年十月の条に、「日本武尊、則ち上総より軋りて、陸奥国に入りたまふ。(中略)海路より葦浦に廻る。横に玉浦を渡りて、蝦夷の境に至る。」(51)とある。葦浦は鴨川市江見の吉浦に比定する説があり(52)、玉浦は『倭名類聚抄』に下総国匝瑳郡珠浦郷がある(53)ので、九十九里浜沿岸に想定する(54)ことも考えられている。今日まだそれらの論定は容易ではないが、海路で陸奥に向ったと考えられる。香取も鹿島も入海安是海の内側に立地し、海上交通の基地とは絶好の位置にある。なお、香取と側高(そばたか)の沿岸に陸奥の産馬を奪取してきたという伝承があったり、それを追跡してきた陸奥の神が渡ることが出来なかったという伝承が残る(55)のも香取鹿島が東北への基地であったと推考したくなる。さらに、香取西方の神崎町(こうざき)の神崎神社の祭神が天鳥船命であり(56)、やはり航海に関係がある。これだけでなく、香取・鹿島両神宮に船に関連する神事があ

るのは、いずれも香取・鹿島が水上交通と深い関係がある(57)ことを物語る。伊勢が東方常世からの浪寄せる土地であったということからして、やはりその擬きの環境のこを神社勧請の位置に選定したとも考えられる。

この北方思想が北辰信仰と結びつくことは容易である。古代人は北天に動かない星、しかし実際は真北極より一度離れているので、天の北極を中心にして小回転しているのであるが、その星を『史記』天官書にも天極星といい、北辰とも呼ぶ。最高の天神が北極星であり、天帝の太一であって、中国の哲理では天の中宮＝北極星を神靈化し、太一と呼称した。密教の影響により北辰は妙見菩薩となり、この信仰が熾となるに及び、神への接近の媒介して地上景観を象徴化するようになった。この事例研究については、すでに別稿(16)(17)(18)に論説した。

未知の世界への探求

西南日本から東北日本に向わせた要因は何であったか。冒頭に若干説明したが、それは別に論じたように、東北の広大な面積と東北地方南半部に展開する肥沃な平地である。しかしそれは見聞してからのことであり、当初に東北へ趣かせる動機がなければならぬ。あるいは東へ向わせた魅力は何であったのか。それは単なる人間の未知の世界への探求なのであろうか。

日本の遠古の場合、『日本書紀』の神武紀によると、「東に美き地有り、青山四周れり」(58)とあり、また垂仁紀二十五年三月の条には、「天照大神、倭姫命に誨へて日はく、『是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可怜し国なり。是の国に居らむと欲ふ』とのたまふ」(59)と記されている。さらに、景行紀の二十七年春二月の条には、「武内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に、日高見国有り。(中略)亦土地沃壤えて曠し、撃ち

て取りつべし』と申す(60)とある。

このように遠古の昔に、東方に環境良好にして美観で豊饒の土地があり、長生不老の世界があると想定し理想郷を求めている。伊勢はその常世の国から浪が寄せてくる土地であり、居住好適の土地柄である。したがって、東へ向えば、さらに良好の、いわば絶好の土地があると、東に魅せられたのであろう。このことは『伊勢国風土記』逸文によって察せられる。伊勢国は「光輝きて日の如き」(61)土地であり、波に乗って、あるいは陸を伝って東に向いたくなる旨の記事がある。またその逸文によると「(神武)天皇は天日別命あめのひわけのみことに勅りたまひしく『天津あまのつの方に国あり、其の国を平げよとのりたまひて、即ち標しるしの劔を賜ひき」(62)とある。当時、天津の方とは大和の宇陀からは、空の彼方といえは東方遙かなる伊勢国のことであろう。天津の方といえば、わが国の古代では、東西を日の縦と考えている(63)ので、東の方を指したとも想像しうる。

要するに、東方に魅力があったのである。前述したように、天富命は東に沃土を求めて、安房に入植している。崇神朝になると、十年の九月に武渟川たけぬかは別を東海に遣し(63)、四十八年四月には豊城命とよきのみことをして東国を治めさせた(64)。さらに景行朝になると、二十五年から二十七年にかけて、武内宿祢を北陸および東国に遣し民情を視察させ(65)、四十年十月、日本武尊は東夷遠征に向い、伊勢、東海、相模馳水から上総へ、そこから陸奥に入った(66)という。そののち天皇は五十三年に東海から上総に至り、海路で淡水門を渡り巡幸したという記事(67)がある。ここにそれらの行動が歴史的事実であったというのではなく、神話のなかに存在し続けたということは、遠古における日本民族の地理観あるいは世界像というものの一端を物語っていると考えてよからう。

かかる古代日本民族東漸の様相を式内社の分布という証拠から吟味検討しよう。もちろん、本課題に沿うため、畿

畿内から常陸までの太平洋沿岸およびその周辺諸国における郷数と式内社の座数

国	名	郷数	座数	国	名	郷数	座数
山 大 河 和 攝 伊 伊 志 尾 三	城	78	122	遠 駿 伊 甲 相 武 安 上 下 常	江	96	62
	和	89	286		河	59	22
	内	80	113		豆	21	92
	泉	24	62		斐	31	20
	津	78	75		模	67	13
	賀	18	25		藏	119	44
	勢	94	253		房	32	6
	摩	14	3		綵	76	5
	張	69	121		綵	91	11
	河	69	26		陸	153	28

内から常陸にかけての範囲に限ることにする。古代神社を取り挙げた根拠については、すでに別稿(68)で論説したが、『令集解』にも規定されている通り、村毎に神社を勧請し、社首を選出して農業神・田神を祭祀する。そして神社を中心にして村民の和合を図り、村落共同体の紐帯を強固にしたのである。これは現在でも農村地帯にみられる現象であり、過去も現在も日本の農耕社会では、生活行事や農耕儀礼の中心的存在が神社である。しかも式内社を指標としたのは、古代村落の分布と神社を巨視的に把握するとすれば、これ以外にない。それに式内社はいうまでもなく、延喜神名式に記載された神社であるから、祈年祭に国家から幣帛(へいはく)を受けるといふ国家的待遇の神社(69)であり、国家的組織の行事に編入されていることになる。このことは一方、式内社の鎮座するところは、当時すでに国家の行政組織のなかにも編入されていることを物語るのである。

さて式内社の分布をみると、畿内・伊勢・尾張にその分布数が多いのは首肯しうるが、伊豆という「中国」に九二座という数は高い。上表に表示したように、郷数と式内社座数の関係(69)をみても伊豆の場合は二対九の割合であるが、西隣の駿河は「上国」であるにも拘らず六対二、遠江では五対三、東隣の相模では七対一、武蔵では三対一の状態である。郷

遠江～下総における
単位郷当りの平均平
地面積

国名	町歩
遠江	858
駿河	1,503
伊豆	874
相模	1,082
武蔵	2,226
安房	508
上総	1,274
下総	1,897

伊豆諸島における
式内社の分布

島名	座数
大島	3
利島	1
新島	1
式根島	1
神津島	2
三宅島	12
御倉島	1
八丈島	2

数を式内社数と対比したのも、やはりその郷数の比率が、国家の地方行政組織のなかに編入されている集落存在の多寡の蓋然性を示すことにもなる。しかるに、郷数と座数とが比例しないのは何に依拠するものであろうか。それについては今直ちに検討しうるものではない。伊豆国だけが、郷数に対して式内社座数が驚異的に多い。因みに、平地面積をみても、伊豆の場合は少ない。郷当りの平均平地面積(丸)もきわめて低い数値である。このように考察すれば、伊豆の場合、集落に対して式内社数が多いということになり、不可解である。

そこで伊豆の式内社について、今少し詳細に分析してみよう。国内三郡のうち、賀茂が四六座、田方二四座、那賀が二二座である。さらに、賀茂のうち伊豆諸島についてみると、三宅島が最高の一二座で、諸島では二三座を占める。もちろん、式内社の鎮座位置が現在不詳になっているものも幾社もあり、また推定のものであるので正確な数値ではない。しかしながら、日本全国的視野からみても、伊豆諸島のその分布比率は高い。因みに、全国の主要各島嶼の式内社座数をみると、対島が二九、壱岐二四、隠岐一六、淡路一三、佐渡が九座であり、それらはいずれも一国を形成しているのので、伊豆諸島は多いといわざるをえない。それに伊豆半島の先端部や西海岸に式内社の分布が密であ

る。これを見ると、紀伊半島から海路を利用しての渡航ではなからうかと想像したくなる。現在、伊豆諸島や伊豆半島の海岸部に「寄宮」信仰があるというのも、その想像を助けてくれる。その信仰は、水平線の彼方から昇る日輪を神格化し、また潮に乗って漂流してきたものを奉持し神格化して神体とするという民俗信仰である(22)。これは海からの渡来を物語るものであろうと推測される。

紀伊半島・四国から黒潮を利用すれば、必ず伊豆半島や伊豆諸島に到着するとは限らない。過去の黒潮の経路は不詳であり、現在の経路が過去と同一であるともいえない。しかし最近の人工衛星による海流調査によると、九月から十一月にかけては本州の沖合をやや直線的に東流するが、一月頃になると、足摺岬から紀伊半島の沖合を鳥島寄りに大きく蛇行し、それから北上して東に向きを変えて伊豆諸島の間を東流するようである。あるいはまた、季節によっては、紀伊半島沖合から鳥島寄りに流れ、それから伊豆諸島を包むように大きく蛇行し、房総半島先端の沖合で大きく東へ曲廻し、房総沖を流れる場合もある(23)。したがって紀伊や四国から黒潮を利用して、伊豆や房総に到着するのは、幸運といわざるをえないであろう。そうすると、かかる情報も不明で、未知の東方に向うには、やはり古代人は信仰的な東方志向の憧憬があったのではないかと考えざるをえない。

古代人の宇宙像と生活空間基準軸の変化

日本列島は南西から北東にかけて、狭長な弧状をなす。本州は西南日本から関東にかけては東西に長い。古代日本人が東方の常世の国を求めて東に向う際、九州から大和までは山陽の陸伝いでも、海路でも容易である。海路は瀬戸内という内海の多島海を渡航すればよい。しかし大和から東の常世の地へは、伊勢に至り、伊勢から海上の東方へ向

うとすれば容易なることではない。信仰的憧憬にも近い理想郷常世の国を求めるならば、危険を恐れず、海路を利用し東に向えば、伊豆諸島に到着する場合もある。しかし、古代人はそれを必ずしも確認しえなかったであろう。この諸島はやや南北に散在する。しかも海上指呼の間にあるので、北に向って伊豆半島や房総半島に上陸することになる。伊豆大島から伊豆・房総兩半島にもまた指呼の間である⁽⁷⁴⁾。伊豆半島や房総半島から東へ向うとすれば、本州の陸地形状からすれば、自ずと北に向うことになってしまう。東方の常世の国を目指して進んでいる筈のものが、実は北に向って進行していることになるのである。

要するに、西南日本では古代日本人の空間の軸が東西であったのが、房総からは空間の軸が南北に変化してしまうのである。東西軸から南北軸に変化したということになると、若干の不可解な事実が明瞭になって現われてくる。まず、鹿島神宮の社殿が北向きであるが、神座は東を向く⁽⁵⁰⁾。これについては、対夷対策の祈願の關係上、あるいは民間伝承の信仰上、また出雲大社の社殿構造との共通点などから解釈されている面があるが、筆者はここにいう空間基準軸の変化という観点から考慮する必要がある。

なお現代からみれば些細なことのように考えられるが、古代としては重要な現象であることが多い。たとえば、国府や城柵についてみても、常陸国府では、南北中央軸の真北に「星の宮」が鎮座する⁽¹⁶⁾。かかる事例は、この他に下野国府の内山説擬定地、安房国府、多賀城、徳丹城にもみられる⁽¹⁶⁾。

東北に入りもう一つ検討を要することがある。それは多賀城外郭線南辺に現存する多賀城碑である。これについてはすでに多くの研究があり、偽作説も現われている。なおまだ発見状態も不詳である。その他多くの疑問点が残るが、碑文銘の「頂上」に西という文字が刻まれている⁽⁷⁵⁾。これは何を意味するのか不可解といわざるをえない。「西」

を最上に配置するということは、西を基準にしていることなのか。筆者は、西から東へという開発東漸を意味するのではないかと想像したくなる。

胆沢城の場合、胆沢城の鎮護安穩息災を祈願するために、胆沢城の南北中央軸の南北延長上の約一〇kmの南北両地点に宗教的施設を配置している⁽⁴⁾。この南北軸も偶然として無視してよからうか。

さらに、奥州藤原氏統治下の平泉の場合についても、『吾妻鏡』によると、東方を正方として都市建設を実施している。事実、平泉の核心をなす金色堂は東向きである。加えて、平泉藤原氏の奥州地域計画にしても、仏教理念に基づいて、南は白河から北は外ヶ浜まで南北に貫通して一町毎に笠率都婆を建立したという。しかしこの記述には方向を錯誤している。白河を西界とし、外ヶ浜を東辺という⁽⁷⁶⁾。これは単なる方向錯誤であろうか。錯誤というよりは、空間基準軸の方位に対する信仰にも似た認識から、相対的な方位感覚となっていたのではないかと想像されるのである。

さて、空間基準軸が東西から南北へと移動した内容を理解するために、前述もしたが、伝承によると、天富命が最初に上陸した安房国について神社の位置と配置から分析してみる。神社といえども位置が変化している場合が多いので、元社地、あるいは旧跡を探ることにした。天富命が天太玉命を祀るために創建した館山市宇太神宮の安房坐神宮の旧跡（感満寺畑）⁽⁷⁷⁾と天太玉命の后神の天比理刀咩命を祀る館山市宇洲宮のいわゆる后神天比理刀咩命神社の創設地（推定地）ともいうべき「明神山」⁽⁷⁸⁾とは海岸沖積平野を介して対峙し、しかも三km余隔って正南北に位置するのである。その両社は式内社である。一方太平洋沿岸をみると、千倉町牧田に鎮座する下立松原神社は美奴射持命がその祖天日鷲命を祭神としたといわれる。この元社地⁽⁷⁹⁾と式内社の高家神社の元社地（同町宮前）⁽⁸⁰⁾とが、これま

た相対し南北に鎮座する。その間隔は約1kmである。さらに莫越山神社と呼ばれる神社が、安房の丸山町杳見神梅と同町宮下の石神畑の二カ所に同神社名の神社が鎮座する。同名の神社は神名式に登録されている。祭神は論定しえないが、『特選神名牒』によれば、前者が手置帆負命と彦狭知命であり、杳見鎮座の神社が式内社として指定されている(81)。なおこの他鈴鹿連胤の『神社殿録』、栗田寛の『神祇志料』、邨岡良弼の『安房国神社志料』など他の諸書にも杳見鎮座の莫越山神社を式内社として考えている(82)。ところが齋藤夏之助の『安房志』には、宮下鎮座の莫越山神社の祭神が手置帆負命と天彦狭知命であり、当社が式内社であると定めているのが目立つ(82)。また杳見の莫越山神社所蔵の延宝八年(一六八〇)四月吉日日付の神主齋東右京進藤清重の『莫越山神社伝記』の序によると、祭神は豊玉姫命・彦火火出見尊・彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊で、側宮に忌部神手置帆負命を地主神として祀っている(83)。一方、宮下の莫越山神社の祭神については、当社の別当寺であった高雲寺の度重なる火災により文書類は焼失し、その詳細は不明であるが、手置帆負命・彦狭知命を主神として、相殿に小民命・御道命・大稻輿別命の三柱を合祀しているという(84)。このように祭神の論究はいずれの神社もそうであるが、なかなか容易なことではないし、また時代により祭神が変化する場合もある。『古語拾遺』によると、手置帆負・彦狭知兩神に天の御量をもって材を伐り瑞殿を造営させ、また齋斧・齋鉏を用いて正殿を構築させている(85)ので、その兩神を祭神とするのが、式内社ではないかと思われる。宮下鎮座の背後には御神体山の渡度山(莫越山)があり、まさしく神奈備山の山容を呈する。その頂上に渡度神社が鎮座し、近くから平安末と推定される青銅製の鈴が発見されており、同莫越山神社の北辺に東畑、西辺に石神畑、南辺に六角堂などの祭祀遺跡がある(86)ことなどから、宮下鎮座の莫越山神社が式内社として扱う説に賛成したいという考えも多い。それは何れにせよ、兩神社が約5kmも離れていて、しかも正南北に並び位置する。なお

珍しいことに宮下の莫越山神社の行事として、大晦日に村の老婆が集まり、薪火を囲み、「わが背子を、莫越の山の呼子鳥、君呼び返せ夜のふけぬとに」⁸⁷⁾（萬葉集、巻第十、一八二二）という歌を吟唱しながら夜を徹して正月を迎えたという。これが不思議でならない。それはともかくとして、安房国の式内社が南北に相並ぶということは偶然の一致として無視して放置するには躊躇する。

要するに、西南日本における古代人の空間意識の基本軸ともいうべき東西の基本線が、伊豆諸島から伊豆半島や房総半島に到来してから、空間像の基本線というか、基本軸が南北に変化したと解釈しては間違いであろうか。

今後の課題として——空間像の想定

右に説述したように、事実、神社の配置といい、国府や城柵と宗教的施設との立地的様相といい、南北線上に斉整的に存在する。これは古代日本人が西南日本から東北日本へとエクメネーを拡大進展させて行くうちに、西南日本での空間認識の基本軸が東西であったが、東北日本に移行するに従い、次第に変化して南北軸になってしまったのである。次第に変化したとはいえ、徐々に回転して変化したのではなく、伊豆・房総辺りになると何時の間にかその意識の基本軸が南北軸に転換したのである。日本列島のうちの本州に沿って移動するうちに、東に向っていると思っていたのが北に向っていたのである。また、北に向うと意識する空間の基本軸が、立体的空間像をも錯覚するようになってしまったのである。詳細は別稿¹⁶⁾で論説したが、北に向うということは北辰を目標とすることになり、北辰は天の中心として、天御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神の神を相当させ、密教導入によって妙見菩薩として信仰するようになった。古代の常陸は天に最も近い国であると考えられ、また常陸に高天原が三カ所もあり⁸⁸⁾、さらに筑波山が

天の二上山として信仰の対象となつて⁽⁸⁸⁾いたことも無視しえないのである。南北軸を三次元の軸と錯覚してためではなかるうかとも思われる。『常陸国風土記』の行方郡の条に、「天人の烟ならば、来て我が上を覆へ」と記載⁽⁹⁰⁾されているのをみれば、常陸を「天」と関連付けて考えていたのではなかるうか。北に向うことは「天」に通ずるものと信じていたように思う。

要するに古代日本人の空間認識の基本軸が、東西軸、南北軸、垂直軸が移動回転するうちに一体となつてしまつていて、現実の自己の人間界を中心にして球体的な空間像を画いていたことになる。換言すれば、X軸が東へ伸びるうちY軸になつてしまい、Y軸が北に向うとZ軸になつてしまうというように、全く混乱して矛盾しているようである。しかし、これが意識のなかで、X軸がY軸、Y軸がZ軸に混同してしまうのである。古代日本人の宇宙像は中央が人間界で、東が神界、西方が他界であるといわれている⁽⁹¹⁾が、エクメネーが拡大進展して行くとそのような単一方向的なものでなく、もう一方の方向の軸を考へるようになり、さらにはそれが三次元的な軸までを想定するようになる。つまり、三次元的な軸の天極は天津国、高天原であり、他方は地の極から根の国・黄泉国である。それら三軸はいずれも両極が存在する。このように両極のある三軸がX軸からY軸、Y軸からZ軸へと回転するような数学的にはあまり考へられないような宇宙像を形成していたのではなかるうか。

そして移動という連続のなかに、空間もまた連続させようとするので、以前の居住空間を現在の居住空間のなかに編成しようとして、擬きの連想空間を想定しようとする。東へのテラ・インコグニターに魅せられて理想郷を求めて移動を繰り返えし、擬きの連想が止揚へと結びつくのである。

註および参考文献

- (1) Koelsch, William A. (1975): *Terrae Incognitae and Arcana Siwash; Toward a Richer History of Academic Geography*. [Lowenthal, David and Bowden, Martyn J. (1975): *Geographies of the Mind; Essays in Historical Geosophy*, In Honor of John Kirtland Wright, Oxford University Press. pp. 63~87.]
Wright, John Kirtland (1966): *Human Nature in Geography, fourteen papers, 1925~1965*, Harvard University Press, pp. 68~88, *Terrae Incognitae, the Place of the Imagination in geography*.
- 村上次男 (一九七七) 世界の構図 一—二頁 Terra Incognita の系譜
- (2) 山田安彦 (一九七六) 古代東北のフロンティア 古今書院
- (3) 前掲 (2) 一〇五—一〇九頁
- (4) 山田安彦 (一九八一) 胆沢城の地域空間構成 立命館大学文学部地理学教室・立命館大学地理学同友会編 (一九八一) 地表空間の組織 古今書院 二二—二二—二二頁
- (5) セベティイ・バルブー著：真田孝昭・山本武利・永井邦明共訳 (一九七一) 歴史心理学 法政大学出版局 五八頁
- (6) Clark, J. G. D. (1952): *Prehistoric Europe; the Economic Basis*, Methuen, London, pp. 7~8.
- (7) 山田安彦 (一九六二) 景観構成要素としての社会規範——十二表法の場合 岩手大学教育学部研究年報 二〇巻 五一—七八頁
- 山田安彦 (一九六六) 歴史地理学における生態系と地域体系 岩手大学教育学部研究年報 二六巻 六九—八五頁
- (8) Dickinson, R. E. (1970): *Regional Ecology—the Study of man's Environment*, John Willey, pp. 24~25.
- (9) Meitzen, A. (1895): *Siedlung und Agrarwesen; der Westgermanen und Ostgermanen der Kelten, Römer, Finnen und Slawen*, Bde 1~4, Scientia Verlag Aalen, 1963.
- (10) 前掲 (1) Wright, J. K. (1966): *Terrae Incognitae; the Place of the Imagination in Geography*.
- (11) シュヴァイントは早くから客観的精神 (objektiver Geist) と文化景観 (Kulturlandschaft) との関係を論じている。Schwind, M. (1951): *Kulturlandschaft als objektivieter Geist*, Deutsche geographische Blätter, 46~1, [Schwind, M.

- (1960) : Kulturlandschaft als Geförmer Geist, Drei Aufsätze über die Aufgaben der Kulturgeographie, Darmstadt. s. 12~15.
- (12) Allen, J. L. (1976) : Lands of Myth, Waters of Wonder; the Place of the Imagination in the History of Geographical Exploration, [Lowenthal, D. and Bowden, M. J. (1976) : *Geographies of the Mind; Essays in Historical Geography, in Honor of John Kirkland Wright*, Oxford University Press.] pp. 41~61.
- (13) 中村元 (一九六二) 東洋人の思维方法二 中村元選集 第二卷 二〇一~二二三頁
- (14) アーサー・F・ライト著・奥崎裕司訳 (一九六六) 象徴性と機能 歴史教育 一四卷一二号 一一~二二頁
- Wright, A. F. (1965) : Symbolism and Function; Reflection on Changan and other Great Cities, *The Journal of Asian Studies*, vol. XXIV No. 4, pp. 667~679.
- 山田安彦 (一九七八) 都城的集落の機能と象徴 歴史地理学紀要 二〇輯 一一五~一四九頁
- 山田安彦 (一九七八) 古代の都市的集落における地域空間構成の理念 住宅金融月報 三二八・三二九・三三〇号 四三~四八頁 三八~四五頁 三八~四五頁
- (15) 中村元 (一九六六) 東洋人の思维方法 三 中村元選集 第三卷 三三三~三四四頁
- (16) 前掲 (14) 山田安彦・都城的集落の機能の象徴
- (17) 山田安彦 (一九八〇) 位置選定の始源的要因——知覚的歴史地理学への準備として 西村嘉助先生退官記念事業実行委員会編 (一九八〇) 西村嘉助先生退官記念地理学論文集 古今書院 六六六~六七二頁
- (18) 山田安彦 (一九八一) 山岳と冬至太陽出没方位と古代地域計画の理念 歴史地理学紀要 二三輯 二二一~二五五頁
- 山田安彦 (一九七九) 平泉古図からみた地域空間構成の理念 歴史地理学紀要 二二輯 五一~五四頁
- Prince, H. C. (1971) : Real, Imagined and Abstract Worlds of the Past, [Board, C., Chorley, R. J., Hagett, P. and Stoddart, D. R. (ed.) (1971) : *Progress in Geography; International Reviews of Current Research*, Edward Arnold, pp.] 1~86.
- (19) 各県庁文書課や各県立図書館郷土史料室等に保管されている「小字一覽帳」により調査を実施した。
- (20) 井上辰雄・増田精一・江坂輝弥 (一九五六) 常陸風土記に見える主要地名と関係遺跡 西岡虎之助・服部之繪監修 (一九

五六) 日本歴史地図 全国教育図書株式会社 所収

(21) 秋本吉郎(一九五八) 風土記 岩波書店 常陸国風土記 信太郎乗浜里 四五頁

(22) 吉田東伍(一九六九) 増補大日本地名辞典 第二卷 上方 富山房 八三〇頁 伊勢国度会郡神崎(こうざき) 八八三

頁志摩国志摩郡浮島

(23) 京都大学文学部国語学国文学研究室編(一九七七) 諸本集成倭名類聚抄 本文編 六二四・六二五・八〇七・八〇八頁

安房国平群郡白浜、安房郡白浜、長狭郡田原、同外篇 日本地理志料——和名類聚抄国郡郷里部箋注——二四九頁 上総国

勝浦の条、神武帝時、祀天富命、令天日鷲命裔勝占忌部須志氏祭之、子孫相統掌祠事、以至今日、阿波有勝浦郡、是其本居、後從天富命一東行、遂邑於此、以勝占、名地者耶。

(24) 吉田東伍(一九七〇) 増補大日本地名辞典 第六卷 坂東 富山房 六七四頁 下総国香取郡神崎(こうざき)

(25) 塙保己一編(一九七八) 群書類従 第二十五輯 雑部一一三頁 古語拾遺

安田尚道・秋本吉徳(一九七六) 古語拾遺 高橋氏文 新撰日本古典文庫 4 現代思潮社

(26) 内務省(一九二五) 特選神名牒 思文閣 七五五―七五六頁

高市志友(一九七〇) 紀伊国名所図会(一) 歴史図書社 六一五―六一七頁

仁井田好古(一九七〇) 紀伊統風土記(一) 歴史図書社 二五七―二六一頁

(27) 山田安彦(一九八〇) 道の伝承(地籍図を読む) 地理 二五卷四号 九九頁

安房の式内社に関しては、千葉大学名誉教授神尾明正先生に貴重な御教示を賜わった。ことに誌上をかりて謝意を表す。

(28) 森谷ひろみ(一九七五) 安房国式内社に関する歴史地理学的研究―第六報 安房郡安房坐神社について 千葉大学教養部

研究報告 A-18 四七頁

(29) 山田安彦(一九八〇) 伝承地の地籍図 地理 二五卷四号 五八一―六三頁

山田安彦(一九七八) 古代直線道路の要因 日本地理学会予稿集II 一五 二四二―二四三頁

(30) 東夷(一九六八) 鹿島神宮 学生社 六四―六六頁

伊能忠敬の日本沿海分間図(文化元年II 一八〇四II 二五八×二二四cm 中川忠英所蔵) 国立図書館 I G C 展示会で閲覧) には、常陸明石海岸には当時集落はなかったが、「明石」の地名が記載されているのは地図上においても必要な地名であった

のであろう。

(31) 野村孝文(一九六一) 南西諸島の民家 相模書房 この他、千葉県(一九六四) 千葉県文化財調査報告書や千葉県教育委員会(一九七四) 千葉県の民家Ⅰ安房の民家などがある。

(32) 多くの文書や具体的証拠があるが、代表的な文献としては千葉県編(一八八三) 房総水産図誌があり、周知の文書としては銚子の外川港外川由来記、勝浦市鶴原真光寺文書、天津小湊町の天津善覚寺文書などを指摘しうる。それらの寺院や木更津市矢那川沿いにある証誠寺には関西系家屋号の墓石がある。

世に名高い記念物として関西系漁民の信仰を表徴する仏足石が勝浦湾八幡岬川津漁港を見下す津慶寺にあり、その足相を有する阿弥陀仏が長生郡長南町千田称念寺に安置されている。

金井嘉佐太郎(一九七一) 仏足跡の研究―その生成・東漸と顕現 仏教書林中山書房
 乾克巳(一九七〇) 房総の熊野神社 房総文化 一一号 三四―四三頁

(34) 房総の古墳については次の文献を参照したので掲げておく。

文化財保護委員会(一九六七) 全国遺跡地図

千葉県小笠原長和・川村優(一九七九) 千葉県の歴史 山川出版社 一九―二七頁

文化庁文化財保護部編(一九七四) 全国遺跡地図12 千葉県 国土地理協会

小林三郎(一九七〇) 古墳文化の波及 大塚初重(一九七〇) 東国古墳の成立 杉原荘介・竹内理三(一九七〇) 古代の日本 第七巻 関東 角川書店所収 五六―六八・六九・九三頁

甘粕健・久保哲三(一九七八) 関東 古墳文化の地域的特色 近藤義郎・藤沢長治(一九七八) 日本の考古学 IV 古墳

時代(4) 河出書房新社 四二八―四九八頁

川戸彰(一九七三) 房総半島における古墳文化の展開―特に六世紀前後の古墳をめぐって― 地方史研究協議会(一九七三) 房総地方史の研究 雄山閣 四五―六二頁

前川明久(一九七七) 東国の国造 志田諄一編(一九七七) 古代の地方史 第五巻 坂東編 朝倉書店所収 六七―八八頁

茂木雅晴(一九七四) 前方後円墳 雄山閣

- (34) A 森浩一・石部正志(一九七八)畿内およびその周辺 古墳文化の地域的特色 前掲註(34) 日本の考古学 IV 古墳時代(上) 二九六頁
- 梅原末治(一九六五)椿井大塚山古墳
- (35) 前掲註(30) 上古の鹿島想定図参照
- (36) 岩坂大満横穴群調査団(一九七三)千葉県富津市岩坂大満横穴群調査報告 富津市文化財調査報告書(一) 六七―六九頁
- 第三七図 千葉県における横穴分布図 参照
- (37) 平野元三郎・滝口宏(一九六七)大同元年在銘横穴 古代四九・五〇合併号 一〇〇―一〇一頁
- (38) 前掲註(37) 一〇三―一〇四頁
- (39) 前掲註(22) 三四八頁 南葛城郡葛村
- (40) 前掲註(26) 特選神名牒 六〇頁
- (41) 前掲註(40) 八八頁 前掲註(22) 三五四頁
- (42) 前掲註(40) 九三頁 前掲註(22) 三五三頁
- (43) 前掲註(23) 六一四・七九八頁 大和国高市郡巨勢
- (44) 前掲註(22) 三四九頁
- (45) 前掲註(36) 二六一―三七頁
- (46) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注(一九六七)日本書紀 上 岩波書店 一四九―一五〇頁
- (47) 黒板勝美・国史大系編修会編(一九七一)続日本後紀 五一頁 承和三年五月丁未(九)日 奉_レ授_二下_一繪国香取郡從三位 伊波比主命正二位。常陸国鹿島郡從二位勲一等建御賀豆智命正二位。(・印は筆者が附した。)
- (48) 前掲註(23) 六二六・八〇九頁
- (49) 千葉県立中央図書館編(一九七〇)千葉県地名変遷総覧 同図書館発行 一四・七四・九一頁
- (50) 前掲註(30) 二七
- (51) 前掲註(46) 三〇五頁
- (52) 前掲註(24) 五八二頁 安房国長狭郡日置郷吉浦 ヨシ・アシに相通するので比定したという。

- (53) 前掲註(23) 六二六・八〇九頁
- (54) 前掲註(24) 六五〇頁 下総国海上郡飯岡の海浜を玉浦という説があるが『倭名類聚抄』(53)の下総国匝瑳郡珠浦郷をここに擬定するのは錯誤であるという。海上郡飯岡村の玉前(たまさま)神社と長柄(ながら)郡(明治二九年〓一八九六〓堆生〓はお〓郡と合併して長生郡と改名)一宮の玉前神社が北と南に鎮座して九十九里浜を守護したという。玉浦とはこの浜浦に外ならないといわれている。
- (55) 前掲註(34) 千葉県の歴史 二〇頁
- (56) 前掲註(55) 二二頁 前掲註(24) 六七五頁
- (57) 前掲註(30) 一六三―一六九頁
- (58) 前掲註(46) 一八九頁
- (59) 前掲註(46) 二七〇頁
- (60) 前掲註(46) 二九七頁
- (61) 前掲註(21) 四三三頁
- (62) 前掲註(46) 三一八頁 東西を日縦とし、南北を日横とす。山の陽(みなみ)を影面(かげとも)と曰ふ。山の陰(きた)を背面(そとも)と曰ふ。
- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 校注・編(一九七二)万葉集(一) 小学館 九二頁 藤原宮御井歌のなかに、白の経(たて)と日の緯(よこ)という語句がある。
- (63) 前掲註(46) 二四三頁
- (64) 前掲註(46) 二五〇頁
- (65) 前掲註(46) 二九六―二九七頁
- (66) 前掲註(46) 三〇三―三〇六頁
- (67) 前掲註(46) 三一四頁
- (68) 山田安彦(一九六四)古代日本の社会倫理と地域体系の成立 岩手史学研究 四四号一―一二三頁
- (69) 虎尾俊哉(一九六四)延喜式 吉川弘文館 一〇八頁

- (70) 前掲註(26) 特選神名牒と前掲註(23) を参照して筆者が作成した。
- (71) 単位郷当りの平均平地面積については、板橋源が恒藤規隆算出による概測一五度以下の平地面積と『倭名類聚抄』の郷数とを利用して算出した数表を参照した。
- 板橋源(一九五三) 陸奥・出羽古代郷考 岩手史学研究 一四号 一一―一九頁、筆者も東国と東北の古代の人口を推計する(藤岡謙二郎編 一九七五)日本歴史地理総説(古代編所収) ために概測傾斜一五度以下の平地面積を検討したことがある。恒藤規隆(一九〇六)の日本地産統計は筆者の文部省科学研究費で購入し、岩手大学図書館に寄付しておいた。
- (72) 渡辺安麿(一九八〇) 伊豆国島々の式内社(上) 式内社のしおり 一五号 七頁
- (73) 倉品昭二(一九八一) 人工衛星で海流を調べる 地図ニュース 一〇四号 一一―一四 図(一) 参照
- なお、図(一)の黒潮の変動図については、より鮮明なる原図を日本地図センターの山口恵一郎氏、海上保安庁水路部海図課の今井健三氏の御尽力により複写していただいた。さらに、両氏と水路部海象課の倉品昭二氏にお世話になり、関係資料まで恵与され詳細に閲覧することが出来た。ここにその関係資料の一部を掲げ、謝意を表する。
- (74) 石井春雄(一九八一) アルゴスブイによる黒潮トラッキング月刊海洋科学 一三巻五号 三三八―三四五頁
- (74) ランドサットの宇宙写真を参照すると理解の一助となる。11, NOV. 80, C. N35-55, E140-12, NASDA LANDSAT, E-22120-00365-5, C. N34-30, E139-45, E-22120-00361-5.
- (75) 宮城県多賀城跡調査研究所編(一九七四) 研究紀要Ⅰ 多賀城碑特集、同所編(一九七五) 研究紀要Ⅱ 続 多賀城碑特集参照(研究紀要Ⅰ 図版二を参照)
- (76) 前掲註(18) 山田安彦(一九七九) 平泉古図からみた地域空間構成の理念
- (77) 前掲註(28) 七頁
- (78) 森谷ひろみ(一九七二) 安房国式内社に関する歴史地理学的研究―第五報 后神天比理刀咩命神社について―千葉大学教養部研究報告 A-9 八九・一〇〇―一〇一頁
- (79) 森谷ひろみ(一九七二) 安房国式内社に関する歴史地理学的研究―第三報 朝夷郡下立松原神社について―千葉大学教養部研究報告 A-4 六二・六七頁
- (80) 森谷ひろみ(一九七四) 安房国式内社に関する歴史地理学的研究―第四報 朝夷郡高家神社について―国史学 八八号

六一頁

(81) 前掲註(40) 三六〇頁

(82) 森谷ひろみ(一九七二) 安房国式内社に関する歴史地理学的研究―第二報 朝夷郡莫越山神社について― 国史学 八六号 四四頁

(83) 前掲註(32) 四五頁

(84) 前掲註(82) 四七頁

(85) 前掲註(25) 『群書類従』所収『古語拾遺』三頁 上段、六頁 下段、

(86) 前掲註(82) 五一―五七頁

(87) 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 校注訳(一九七三) 万葉集(三) 小学館 四七頁

莫越山神社の御神体山である莫越山をみると万葉集所収の「わが背子を」の歌に因むわけではないが、人々にいろいろな想いをおこさせる。永年にわたり、安房の式内社に関する歴史地理学的研究を進めておられる千葉大学名誉教授神尾明正先生の歌に次のようなものがある。「この丘を越えていずくに行かんとす莫越山なり神おろがまん」

一九七七年に安房国を調査した際、神尾明正先生に同行していただき貴重な御意見と御指導を賜わった。記して謝意を表す。

(88) 前掲註(30) 九三―九九頁、一〇一―一〇六頁

(89) 前掲註(30) 七二―七四頁

(90) 前掲註(21) 五九―六一頁 ここにいう「天人」(あまびと)とは天皇統治下の人を指しているらしいが、常陸は「天」を接頭している場合が多い。やはり常陸は天に最も近い土地と考えられていたのであろう〔前掲註(30) 九七頁〕。

筑波山は常陸主要部の唯一の山であるから、伊能忠敬の日本沿海分間図(前掲註30)において位置設定の目標物としている。恐らく古代においても目標としては適当な対象物であったと思われる。

(91) 吉野裕子(一九七九) 陰陽五行思想からみた日本の祭 ―伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として― 弘文堂 二〇―二六頁

本論稿は昭和五六年度歴史地理学会大会(四月二六日 奈良大学)において研究発表した内容に加筆したものである。